

『夜を暴く』

著：李丘那岐

ill：北沢きょう

今日はなんだか機嫌がいいのか。軽口のようなことまで叩く。これはもしかしたら、話が訊けるかもしれないと、朝倉は機嫌のいい笑みを浮かべる。

「それは事実だと思いますけどね……。あ、いや、で、押しつけられたっていうのは、事務処理関係をもってことですか？」

蜂賀に睨まれて、慌てて話を戻した。調子に乗って機嫌を損(そこ)ねてはもったいない。

「誰だって納得いかない書類を作りたくはないからな」

「納得がいかないのは、自殺という結論が？」

本題に切り込めば、蜂賀が鋭い瞳を返してくる。

「おまえはなぜ今さらそんなことを調べてる？」

「父親は自殺じゃないと、遺族から訴えがあったので」

「訴えだけで、なんの根拠もなくガキの言うままに動くのか？」

「息子さんのこと、覚えてるんですね。……そりゃ俺だって、最初は断ろうと思いましたよ。自殺じゃないと証明したところで、記事にはなりにくい案件だと思ったから。でも、これ聞いてもらっていいですか？」

徹が持ってきたマイクロSDを再生する。常時刻まれている蜂賀の眉間のしわがさらに深くなった。

「父親の声だと息子が言ったのか？」

「間違いないそうです。でも、照合できるものはない」

蜂賀は難しい顔でしばらく壁の一点を見つめていた。

「現場には争った跡があったし、命乞(ご)いの声を聞いたという証言もあった。他殺で捜査しようとしたら、上から待たされたがかかった。都合よく目撃者が出てきて、検視の結果も自殺の線が濃厚ときた。上層部に圧力をかけたのは、間違いなく加瀬大臣だな」

蜂賀は淡々と言って、サイドテーブルに置かれていた琥(こ)珀(はく)の液体を口に運んだ。

朝倉も加瀬と聞いて真っ先に思い浮かんだのは現職の文部科学大臣だった。まさか……と思いながら、スcoopのわずかな匂いに釣(つ)られた。目撃証言をしたのは、加瀬の秘書だったのだろう。

「じゃあ、高梨っていうのは……」

「広域指定暴力団、常盤会の幹部。高梨組の組長だ」

朝倉はごくりと唾(つば)を飲み込んだ。ヤクザがらみは予想していたが、思っていたよりレベルが高い。現役大臣と暴力団幹部の癒(ゆ)着(ちゃく)。殺人を容易に自殺にすりかえてしまう権力。怖(お)じ気(け)づくほどネタが大きい。

「わかっただろう。もう首を突っ込むな」

「……警察がしないなら、そこを突けるのは俺たちしかない」

ハイエナのように忌(い)み嫌(きら)われることもあるマスコミの存在意義はこういうところに

こそある。真っ直ぐに蜂賀の目を見る。

「死ぬぞ」

「そうですね」

それは脅しではない。現に人がひとり死んでいる。自分などまるで虫けらのように簡単にひねり潰されてしまうだろう。

「慎重にやってみますよ」

ニツと笑ったら、蜂賀が人を殺せそうな眼差しを向けてきた。

「ふざけるな。手を引け」

「ご迷惑はかけません。不本意な書類をもう一枚書くことになるかもしれませんが」

「やめろと言っているんだ」

絶対命令が下る。応じる言葉しか許さない、支配者の顔。

「わかりました、やめます」

朝倉はあっさり応じてみせた。もちろんこの場だけのものだ。刑事としての蜂賀は、市民を危険から守るという使命感がすごく強い。表面だけでも引かなければ、蜂賀も引けないだろう。

「おまえ——。……俺が調べるから、手を引け」

朝倉は思いがけない言葉に目を丸くする。

引くのがフェイクだということは、そりゃわかっただろうが……、それでもやるなら自己責任と突き放されるつもりだった。蜂賀なら当然、そう言うだろうと思っていた。

突き放せないくらい危険だということか。

「蜂賀さんって……やっぱり優しいんですねえ」

素直な感想を言えば、眉間のしわがまた深くなった。

「迷惑なんだよ。死人が増えるのも、事実と違う書類を書かされるのも。……それに、新事実が出てきたのなら、捜査するのは当たり前のことだ」

しかし、組織が動くことはない。自殺で処理したものが他殺だったとなれば、警察の面子に関わるだろう。そうなれば責任を取らされるのは担当者ではないのか。

「でも、それじゃ蜂賀さんがヤバイことになるんじゃないか……」

「俺はいつだってヤバイ。刑事という職は失いたくないが、そのために捜査を蔑(ないがしろ)にするのは本末転倒だ。辞めてしまった方がいい」

刑事じゃない蜂賀なんて想像もつかないし、こういう男こそ刑事でいてほしい。

「ダメですよ、蜂賀さんは辞めちゃ」

思わず身を乗り出せば、蜂賀はこちらをチラッと見て、グラスの中の踊る水面に視線を落とした。

「加瀬は警察を遺体処理係くらいにしか思っていないし、国民も自分の自己顕(けん)示(じ)欲を満たすために存在していると思っている。絶対に権力を持たせてはいけない人間が、世渡りの巧さだけでいまや大臣だ。あんなのを選んだ国民も馬鹿だが、裏の顔を隠すのが巧いというのも一種の才能だろう。しかし、罪を犯しているなら放置するわけにはいかない」

「あー確かに加瀬大臣って、記者の間じゃ悪評ばかりだけど、笑った顔とかいい人っぽく見えるんですねえ……。どっちかっていうと、蜂賀さんの親父さんの方が悪人面だ」

なにげなく言ってしまっ、蜂賀に睨まれて失言に気づく。

「……やっぱり知ってるか」

蜂賀は溜め息混じりにつぶやいた。

「そりゃ……。蜂賀なんて珍しい名前でも顔があんだけ似てたら、血縁だってことは誰にでもわかるでしょ。曲がりなりにも俺は新聞記者ですよ」

蜂賀の父が衆議院議員の蜂賀吾(ご)郎(ろう)であることは、蜂賀を知るたいがいの人が知っているか、想像できることだ。記者の間では常識の範(はん)疇(ちゆう)だろう。

「似てない」

無然と言ったその顔がもうそっくりだ。刺すような冷たい瞳といい、表情に乏しい陰しい顔といい、実によく似ている。

「その眉間のしわ、そっくりですよ。性格も似てそうですよね。融(ゆう)通(ずう)の利かない頑固者……みたいなどこ」

「絶対似てない」

蜂賀は不快そうに一刀両断にした。急に子供のようだ。

「でも、親父さんの方が若干穏やかそうかな。歳のせいですかね」

「うるさい」

「やっぱり仲悪いんですか？ ついでに取材させてくださいよ。蜂賀家の家庭事情」

面白がって食い下がれば、蜂賀が陰しい顔をずいっと寄せてきた。

「そんなことより、おまえはもちろん襲われてもいい覚悟で来たんだよな？」

「あ、いや、それは……」

ちょっと調子に乗りすぎた。いきなりの形勢逆転にうろたえれば、目の前の顔が急に妖しい雰囲気をかもし出した。この色気は出し入れ自在なのか。ただ見られているだけなのに、なぜこんなにドキドキしてしまうのだろう。

蜂賀の手が伸びてきて、その指先が耳(じ)朶(だ)をかすめ、ビクッと首をすくめる。

「へえ……感じやすいのか？ 鈍そうな顔してるのに」

からかわれているのはわかる。ものすごく失礼なことを言われていることも。

「ち、違っ……じゃなくて、あの、今日はちょっと……」

座ったままソファの上をじりじりと後ずさる。言い逃れにはわりと自信があったのだが、蜂賀の空気に……色気に圧(お)されてしまっている。

「俺の貴重な息抜きの時間を邪魔したんだ。埋め合わせてもらおう。ちょうど体もいい感じに夜モードだしな」

蜂賀がのしかかってきて世界が回転する。仰(ぎょう)臥(が)して蜂賀を見上げる、まさに襲われる体勢に朝倉は固まった。

本文 p82～88 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>